



プロの世界は早ければ2年 自分がどうやったら生き残っていけるか 問い続けてきた16年間 — 岩田稔 —



2021年10月26日、中日戦(甲子園)の試合終了後選手として最後の引退セレモニー感謝の想いをマウンドへ恵まれた16年間だった。

岩田稔オフィシャル



努力はしてない、あたりまえのことをやってきた。

印象に残っている試合

2009年9月9日、先発で登板予定だった岩田さん。昼食をとうとうとしていてと分婉室に入ったよと義母から連絡が入り、その10分後に長女の美来さんが産まれました。

チームメイトに報告すると、祝福の言葉をかけてくれる中「おまえが持つてるか持つてないか今日でわかるぞ。安藤(優也)さんは同じ状況で勝ってるぞ」とプレッシャーをかけてきた藤川球児さん。プレッシャーを感じつつも、ありがたいことやなと当時を思い出します。

「あの時は何か乗り移ってたな」とうれしそうに笑みを浮かべながら話してくれました。

「あの時は何か乗り移ってたな」とうれしそうに笑みを浮かべながら話してくれました。

たからと家族への感謝の気持ちがあるが、ええました。

プロ野球選手としての原動力

岩田さんは1型糖尿病を発症してから、夢をあきらめかけた時もありました。そんな中で、プロ野球選手として当時活躍していた「ビル・ガリクソン」の出版していた本を読んで、俺も野球でできるやんと希望を持ち、自分もプロを目指そうと思いました。

「1型糖尿病患者の希望の星になりたく」と入団当時に話したことは、有言実行してきました。

「ぼく自身希望をもらったように、あいつも頑張ってるし、私もがんばろうと思ってもらえる存在になりたいし、そういう存在にならないといけない。それと、1型糖尿病はまだまだ認知度が低いため、プロになってメディア出演など目立つことで、認知してもらえようと思っていましたから」16年間の思いがそこにありました。

また、1型糖尿病は不治の病として、完治への研究が進んでいませんでした。1回の研究ごとに100万円がかかることもあり、岩田さんは少しでも力になりたい、治る病気になったらいいなという思いから1勝につき10万円の寄付をし、通算500万円になるといいます。

そういう活動も公表している中で、賛同してくれる企業もあり、研究も順調に進みました。

ピクニックファミリー(ファン)への想い

野球選手として1型糖尿病の根治に向けて活動をし、引退した今、形は変わっても今までやってきたことを何か続けていけたらと考える岩田さん。野球選手の時には中々できなかったこととして、1型糖尿病の患者会の人へ直接会いに全国を回りたいといっています。

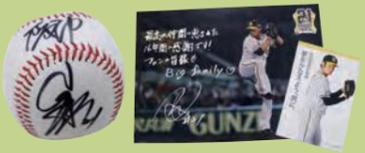
「ファンの存在がなかったら張り合いがなかったし、たくさん励ましてくれました。これからは、日本全国にいるファンを巻き込んで活動していきたい。この社会で、これからは自分1人の力ではやっていけないと思うし、家族みたいな関係性のある人たちをどんどん増やして、協力しあえたらとの想いからピクニックファミリーという言葉を使いました」と今後の活動に向けて語ってくれました。

「少しずつ土台をつくっていく、世界にも目を向けていきたい」とこれからの新しい一歩を歩みはじめています。



大野智行さん
産まれたときから阪神タイガースのファン

同じ守口市民として病気をもちながらよう頑張りはった!入団当時からずっと応援してきました。これからの活躍も期待してます。



引退セレモニーで配っていた冊子とポスター。直筆のサインボールはいつも行っていた散髪屋さんをお願いして、もらった宝物の一つ

気の優しい子で、自分がエラーしたら泣いていた。まさかプロになると思ってなかった。本人の努力やな!



野球大会での祝賀会の一枚。笑顔があどけない岩田さんと優しい人柄は今と変わらない入江さん



入江利廣さん
岩田さんが小学1〜6年生まで所属していた庭窪スポーツ少年団の団長。今でも付き合いがある



- ①3歳のころ。お兄ちゃんとの1枚。このころから野球に夢中!(写真右)
- ②よく野球の練習をした淀川側道公園(通称「たこ公園」)高速道路の高架下の柱に向かって壁あてをしていた。雨が降ってもぬれないのがメリット。
- ③・④現役時代の投球フォーム。井川慶さん、下柳剛さんのような自分を持つてる人の背中を見てやってきた。周りに合わせることも大事だが、そうじゃない部分の方が大事だと、自分のやりたいように、やらなあかんことをしっかりやる精神だった。
- ⑤株式会社Family Design Mを立ち上げ、新たな船出として引退記念ファンミーティングを実施。同じもりぐち夢・未来大使のU.K./楠雄二朗さん(写真右)を司会に迎え、いいスタートが切れた。

